〔巻頭言〕

創価女子短期大学×SDGs

SOKA Women's College × SDGs

SDGs推進担当　青 野　健 作

このたび『創価女子短期大学紀要』第54号を「SDGs特集号」という形で発刊することとなった。ご執筆いただいた諸先生方に心より敬意を表すると共に、関係する委員会の教職員の方々の陰のご尽力に心より御礼と感謝を申し上げたい。

ご存知の通り、2015年9月、ニューヨークの国連本部で行われた国連サミットにおいて、「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」が採択された。SDGsは、2030年まで地球規模で達成を目指す国際目標であり、「誰も置き去りにしない（No one will be left behind.）」という共通の理念に基づいて、経済・環境・社会の地球規模の課題に対して、17の目標とそれを達成するための169のターゲットを設定している。持続可能な地球の未来のために、人類の連帯と行動が求められている。高等教育機関である大学が果たすべき使命も大きい。

本学は、2021年4月より開学40周年に向けた取り組みとして、『女性（あなた）が輝く未来を拓く』をテーマに掲げ、「輝く女性の育成」と「SDGs」の推進に、全学をあげて取り組むこととなった。本学の創立者池田大作先生

は、1996年にコロンビア大学ティーチャーズカレッジで「『地球市民』教育への一考察」をテーマに講演され、地球的な課題を自覚させる教育を念願し、具体的に「平和・環境・開発・人権」の４項目を挙げられた。そして、本学は、短大教育のスローガンとして「人類の幸福と平和を創造する地球市民の育成」を掲げ、2003年に新たに「地球市民教養科目」を設置し、地球規模の課題を「平和」「環境」「開発」「人権」の４つの視点から学ぶカリキュラムを整えることとなった。

SDGsという言葉だけを見ると2015年以降に何か始めたような印象を持つかもしれない。しかしながら、本学は、開学当初から社会課題への解決に向けた人材育成の取り組みを行ってきており、以前からの取り組みをスプリングボード（跳躍台）として、更なるSDGsの達成に向けて貢献していくことを念願している。そして、「建学の指針」を胸に、社会で活躍できる女性リーダーの育成を目指し、これまで１万2,000人を超える卒業生を社会に輩出してきたことは、混迷の世の中にあって、女性が輝く未来を切り拓いてきた証左であると確信するものである。短大の具体的な取り組みとしては、2012年度以降、新入生全員にタブレット端末「iPad」を配布し、ICT教育にも力を入れてきた。また、授業時等のデジタルデータ配信による紙の使用枚数の大幅削減、ボランティア部によるエコ活動、学内のウォーターサーバー設置など、SDGsの各ゴールの達成に向けて尽力してきた。さらに、短大での学びを通して、大学コンソーシアム八王子の学生発表会等の機会を活用し、自治体とも連携し、社会課題解決のために様々な提案を行うことで住みやすい街づくりにも貢献してきた。

2021年度より、短大入学１年次春学期に全短大生が受講する「基礎ゼミナール」において、「これからの社会を考える」をテーマに、SDGsの様々な分野を学習する体制を整えると共に、2022年度より、教養教育の主眼として「教養科目」という新たなカリキュラムをスタートさせた。教養科目では、幅広い見識と深い教養を身につけ、グローバル化が著しい世界で必要とされる女性リーダーとしての素養を培うべく、仕事と生活、女性としての生き方を学ぶライフデザイン、外国語、ICT、キャリア教育及び創立者の思想

や創価教育の歴史を学ぶ科目群を設置するとともに、地球市民としての意識を培い、SDGs について学ぶ「地球市民科目群」を設置し、「SDGs と経済社会」、「発展途上国の政治と経済」などの講義を新設することとなった。このことを通じて、１年次秋学期以降も、教養科目や２年次のゼミナールでの学びを通して、短大２年間で、SDGs に示されている社会課題を「他人事」ではなく「自分事」と捉える機会を提供する教育環境を整えることができた。これはひとえに短大教職員をはじめとする関係者の皆様のご尽力の賜であると、この場を借りて心より御礼と感謝を申し上げたい。

創立者池田大作先生は、短大開学にあたり、建学の指針「知性と福徳ゆたかな女性」「自己の信条をもち人間共和をめざす女性」「社会性と国際性に富む女性」を発表された。本学は、この「建学の指針」を大切にしながら「学生第一」の精神を堅持し、SDGs の推進に邁進していく所存である。2021 年 11 月には、学内の女子トイレに生理用ナプキンの無料ディスペンサーが設置された。「生理の貧困をなくし、生理のことをオープンに語れる世界」をビジョンに掲げ、学生が独自に研究調査を行ってきた賜物であるということを銘記しておきたい。コロナ禍で奨学金を必要とする学生が増えていることも考慮し、学生が安心して学業に専念できる環境を作っていくことを学生が主体的に考え、「いつでもだれでも安心して使える」生理用ナプキンの無料ディスペンサー「OiTr（オイテル）」の設置を大学に提案し、実現に至ったのである。この取り組みは、関東の女子大・女子短大として初めての導入となる。その後、学生主体の活動は、東京富士美術館にも波及し、全国の美術館で初めて OiTr を設置にすることとなった。地元八王子市のタウンニュースにも掲載された彼女たちの活動は、社会人基礎力育成グランプリ（主催：一般社団法人社会人基礎力協議会）において２年連続３度目の日本一に結実することとなったのである。そして、今後入学してくる次の代の学生にも SDGs に関する様々な社会問題について持続的に議論していくために、本年４月、学生主体の「SDGs ワークショップ」を立ち上げる運びとなった。「SDGs ワークショップ」があり続ければ、SDGs に関する社会課題について短大で幾代にもわたって議論できる、そういうアイデアである。ワークショップ発足後、生理の貧困の問題に加え、環境、平和、ジェンダー、街づ

くり等の各プロジェクトが立ち上がり、短大の SDGs に取り組む新たな伝統を築いていこうとの思いで活動を行っている彼女たちの姿を高く評価したいと思う。

今回の「SDGs 特集号」となった短大紀要は、専任の先生方が教育と研究に尽力してきた賜物である。各先生方が独自の観点（観光、短大教育、英語教育、法学）で SDGs を研究されており、本学として SDGs 達成に貢献していくための貴重な研究成果であると言えよう。“Think globally, act locally.”（地球規模で考え、地域で行動する）とあるように、短大生が身近なところから行動し、環境や人権など地球規模の課題に思いを寄せる「地球市民」へと成長できるよう、大学としても SDGs の実践を行っていく所存である。そして、開学 40 周年に向けて、また、2030 年の SDGs の達成を目指し、教職学一体となって新たな歴史を築いて参りたい。